

「イエスはヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった」。これがマタイによる福音書が記すイエスの誕生です。当時の占星術は今日で言えば天文学であり、当時の最先端の学問でした。マタイによる福音書のイエス誕生物語は、光という主題を用いて、東方の占星術の学者たちがある星を見て、ユダヤ人の王として生まれたことが示されていると理解し、その星を追ってユダヤに来たと記します。彼らがそこに見たのは、全世界のまことの王、救い主の誕生の徴でした。著者はイザヤ書 60 章を手がかりにして、光に向かって国々が集まる、あるいは異邦人が贈り物を携えて来るという内容をイエスの誕生物語の中に取り込んだと思われます。ユダヤ人の王として生まれたイエスによって不安を覚えたのはヘロデ王だけではなく、エルサレムの人々も皆、同様でした(3 節)。神の民としての誇りをも抱いているエルサレムの人々にとって、占星術の学者たちは怪しげな、まことの神を知らない、ユダヤ人が蔑んだ異邦人でした。そのような人たちが伝えるユダヤ人の王の誕生の知らせを聞いて、戸惑いと不安がわき起こったのは当然かもしれません。ヘロデ王は祭司長、律法学者たちを集めて、「メシアが生まれる地はどこか」と問い、彼らはベツレヘムと答えます。6 節に引用されている言葉は偉大な王であり民の良き牧者であるダビデのようなメシアを期待する旧約聖書時代のイスラエルの人々の切望を表しています。初代教会の人たちはイエスがベツレヘムで生まれたことをこの旧約聖書の言葉で確信したのです。しかし、イエスは「ナザレのイエス」という呼び名が示すとおり、ナザレの出身と思われます。「ベツレヘムに生まれ」という表現は救い主はダビデの家から生まれるというユダヤの人々の切望を象徴しているのです。イエスを最初に礼拝した人が異邦人であったことは重要です。この出来事を通して、著者はイエスによってもたらされた救いが民族の壁を越えて総ての人にもたらされる、という初代教会の人たちの信仰を示しているのです。

この福音書は「イエスはインマヌエルと呼ばれる」と記しています。インマヌエルとは、「神我らと共にいます」という意味です。そして、復活させられたイエスは、弟子たちに現れ、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(28:20)と言った、と記されています。「インマヌエル」として生まれた方が、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と言うのです。これは初代教会の信仰告白です。神さまが共におられるならば、私たちはどんな時にも希望をもち、喜びをもつことができます。クリスマスはそのような私たちに大いなる喜びが与えられた時なのです。